

浄妙寺跡発掘調査報告書

2013

宇治市教育委員会

序

宇治市では、近年宇治川太閤堤跡が発見され、全国的に注目を集めました。そして平成21年7月には国の史跡に指定され、現在その整備事業に取り組んでいます。

しかし、それとともに宇治を特徴づけるのは、平等院や宇治上神社などの世界遺産をはじめとする藤原氏に関係する遺跡群です。平安時代後期には、平等院の西方に街区が造られ、そこには多くの別業が造られました。その街区は今の宇治の市街地に受け継がれています。

平安時代の宇治というと、どうしても宇治橋周辺の地域が取り上げられがちですが、もう一つ藤原氏にとって重要な地域があります。それが木幡です。木幡は藤原氏の墓域だったのです。そこに藤原氏の墓の菩提を弔うために、藤原道長が建てたのが浄妙寺です。

浄妙寺跡は、平成2年に中心の堂である法華三昧堂の調査を行っていますが、今回の一連の調査は、史跡として遺跡を保護するため、その範囲を確認するための調査です。

末筆になりましたが、発掘調査の実施にあたって、ご理解とご協力をいただいた関係各位に心より感謝の意を表します。

平成25年3月

宇治市教育委員会

教育長 石 田 肇

例 言

1. 本書は、浄妙寺跡範囲及び内容確認調査報告書である。
2. 本書は宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書の第87集にあたる。
3. 本書で使用する座標は、世界測地系を用いた。
4. 本書に収録する遺物写真は、寿福写房（寿福 滋）に委託した。
5. 本書の執筆は、4-C・5-Aを桑宮慶一が、その他を荒川 史が行った。
6. 本書の編集は、宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課文化財保護係が担当し、実務を荒川が行った。

本 文 目 次

1 調査に至る経過と調査経過	1
2 歴史的・地理的環境と過去の調査	5
3 浄妙寺跡の発掘調査	8
4 金草原遺跡の発掘調査	12
5 主要出土遺物	13
6 総括	17

挿 図 目 次

Fig.1 調査地の位置図	3
Fig.2 周辺の遺跡分布図	6
Fig.3 浄妙寺跡・金草原遺跡調査トレンチ位置図	9
Fig.4 浄妙寺の範囲	18

付 表 目 次

付表1 報告書掲載遺物一覧表	20
----------------------	----

1 調査に至る経過と調査経過

A 本項の目的

本発掘調査報告書は、宇治市木幡赤塚4番・木幡金草原6-1・木幡御蔵山39-12で宇治市教育委員会が実施した、浄妙寺跡の範囲及び内容確認調査の内容と成果を報告するものである。

B 発掘調査に至る経過

浄妙寺跡は、昭和42年の木幡小学校建設に伴う発掘調査で確認された遺跡である。そもそも浄妙寺は、藤原道長が藤原氏の菩提を弔うため寛弘2年（1005）に建立した寺院として知られていたが、戦後の段階ではその所在は不明となっており、わずかに林屋辰三郎が木幡赤塚付近に所在することを指摘していた。この場所に木幡小学校の建設が計画され、事前の発掘調査が実施された。その結果浄妙寺の本堂である法華三昧堂の一部が確認され、校舎は建築場所を変更して建設された。

その後平成2年度に校庭の改修工事が計画されたことを受けて、遺構を破壊しないため正確な遺構の位置と埋没深度を確認するための発掘調査を実施した。この調査では法華三昧堂の全容を明らかにし、さらに多宝塔と思われる遺構も確認した。

宇治市教育委員会では、平成5年度から白川金色院跡の調査を実施し、平安時代から中世にかけての遺構が良好に残っていることから、市内の藤原氏関係遺跡群の史跡指定を目指すこととし、その対象遺跡として白川金色院跡・浄妙寺跡・松殿跡をあげ、関係機関との調整を図った。

白川金色院跡の発掘調査が平成14年度に終了したことから、平成15年度からは浄妙寺跡の発掘調査を実施することとなった。

C 発掘調査の実施

発掘調査は、平成15年度から18年度、及び平成23年度の5カ年にわたり実施した。なお、浄妙寺跡に関連する範囲は、現在の周知の埋蔵文化財包蔵地としては浄妙寺跡と金草原遺跡にまたがっており、それぞれの遺跡の調査回数をもって表記する。また各トレンチ名は、調査当時は年度ごとに数字をふっていたが、本書で統一するにあたり調査回数を冒頭に冠した名称に冠し、2桁のトレンチ番号を付す3桁のトレンチ名に変更する。

平成15年度の調査（浄妙寺跡3次調査）

平成15年度の発掘調査は、平成2年度の調査で推測した多宝塔の遺構を明確にすることと、小学校敷地の西端が寺域に含まれるのかを確認するため、2か所のトレンチを設定して行った。多宝塔のトレンチでは、塔基壇の南西コーナーを検出すべくトレンチ設定を行ったが、この部分は学校建設の際の造成により削平を受けており、地表面で地山を検出するような状況であった。このため、瓦の出土は見たものの顕著な遺構は検出しなかった。

学校敷地西端のトレンチでは、本来の地形が東から西に傾斜する緩斜面であることから、地表

下約2mで遺構を検出した。ここでは溝・ピット等を検出し、13世紀代の土器などが出土したことから、学校敷地は浄妙寺の寺域に含まれるものと判断した。

平成16年度の調査(浄妙寺跡4次調査)

平成16年度の発掘調査は、寺域の北限を明らかにするために、敷地の東端に南北方向のトレンチ(401トレンチ)と敷地北部に東西方向のトレンチ(402トレンチ)を設定して行った。401トレンチでは、整地層とその下層に13世紀代の土器を含む土坑を検出し、鎌倉時代以後にも寺地の改修が行われていることが明らかになった。402トレンチでも同様の状況であり、学校敷地の北端まで寺地が広がっていることが明らかになった。

平成17年度の調査(浄妙寺跡5次調査)

平成17年度の調査は、平成16年度の401トレンチ北部において、徐々に地山が下がっていく状況であったため、敷地北端に谷状の地形がありこれをもって寺域の北端としていた可能性が考えられたため、平成16年度の401トレンチのさらに北方にトレンチを設定した。さらに浄妙寺の南には川が流れていたことから、寺域の南限を確認するためのグリッドを2か所設定した。調査の結果徐々に遺構面は下がっていくものの明らかな谷地形は確認できなかった。また小規模な基壇状の高まりを検出し、鐘樓の可能性を考えた。グリッド調査では、河川堆積を確認し川の位置を確認した。

また、調査中に隣接する保育園の敷地において運動場の整備をすることが明らかになったため、急遽トレンチを設定し調査を行った。その結果遺構は検出しなかったものの、瓦等の遺物が出土し、小学校敷地のさらに北まで寺域が広がることが明らかになった。

平成18年度の調査(金草原遺跡2次調査)

これまでの調査で、木幡小学校の敷地が現在の校舎の北方のほぼ全域が浄妙寺の寺地に入ることが明らかになってきた。このような状況の中で、寺の東方の状況が明確ではなかったが、学校敷地の東に隣接する茶畑から、現在重要文化財に指定されている青磁の水注が出土しており、寺の東側は墓域になっているものと考えられた。

平成19年1月24日、木幡金草原6-1他で集合住宅建設を行う旨の埋蔵文化財発掘の届出が提出された。当地は接続道路より低く、道路面まで盛土を行い基礎掘削するものであったため、掘削は遺構面まで届かず、立会調査指導となる案件だった。しかし、当該地が青磁の水注が出土した茶畑の南に隣接していることから国庫補助による発掘調査を実施した。調査の結果、河川堆積の状況を確認し、旧堂の川の流路もしくはそれに大きく影響を受けた場所であることがわかった。

平成23年度の調査(金草原遺跡3次調査)

平成19年度には宇治川太閤堤跡の発見があり、保存に向けた調整、範囲確認調査、史跡指定に向けた事務等に追われ、浄妙寺の調査は一時中断することとなった。

この間平成21年度には木幡小学校の校舎増築に伴う発掘調査を実施し、寺域の南限にあたる築地跡を検出し、寺域の南限がより明確になった。

平成23年度の調査は、青磁水注が出土した同じ丘陵において実施した。青磁水注は丘陵下部の



Fig.1 調査地の位置図(平成17年測量、5000分の1)

斜面において茶畑を拡張した際に発見されたと伝えられており、丘陵上においても同様の遺構の存在が予想されたため3ヶ所のトレンチを設定して調査を行った。調査の結果、若干の遺物は出土したものの遺構は検出しなかった。

D 発掘調査組織

発掘調査組織は以下のとおりである。

平成15～18年度

発掘調査責任者	宇治市教育委員会	教育長	谷口道夫
			(平成17年10月11日まで)
		同	石田 肇
			(平成17年10月12日から)
発掘調査事務局	宇治市歴史資料館	館長	五艘雅孝
			(平成15年度)
		同	吉水利明
			(平成16～18年度)
		同	主幹兼文化財保護係長 吉水利明
			(平成15年度)
		同	文化財保護係長 杉本 宏
			(平成16～18年度)

発掘調査担当 宇治市歴史資料館 文化財保護係 主任 荒川 史

発掘調査参加者 大原瞳、奥里子、北澤英子、久保千恵子、志村みどり、棚田祐子

平成23年度

発掘調査事務局 宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課 課長 久下 伸

同 主幹兼文化財保護係長 杉本 宏

発掘調査担当 歴史まちづくり推進課文化財保護係主査 荒川 史

調査員 桑宮慶一

2 歴史的・地理的環境と過去の調査

A 地理的環境

浄妙寺跡のある宇治市木幡は、宇治市の北東部に位置し、北と東は京都市に接する。木幡の東には中生代の醍醐山地があり、その西には大阪層群の丘陵がある。さらにその西には主に山科川が形成した沖積地がある。木幡のすぐ西には木幡池という山科川起源の池が残っており、安定した平地は非常に狭い。

丘陵地は堂の川をはじめとする小河川によって開析され、3つの丘陵に分けられる。浄妙寺はこの中の北端の丘陵の南西部に位置する。

B 歴史的環境

木幡という地名は現在宇治市北部の地名としてあるが、かつては桃山丘陵も木幡山と呼ばれ、また式内社の許波多神社は現在の五ヶ庄地域にあることから、木幡は広域の地名であったことが明らかであり、またこのことは桃山丘陵から五ヶ庄までの地域が一体のものであったことを示している。従ってこの範囲の地域の検討を行うことが必要となる。

旧石器時代・縄文時代の遺跡は五ヶ庄地域の二子塚古墳・寺界道遺跡がある。二子塚古墳の前方部墳丘からは黒曜石製のナイフ形石器が出土している。古墳の墳丘盛土中の出土であるため、遺跡の正確な位置は明らかではないが、古墳の南に隣接する地点の調査では、広範に土を削平した痕跡が認められたことから、古墳からそう遠くないところに旧石器時代の遺跡があったものと思われる。縄文時代では二子塚古墳の外堤下層から後期の土器が、寺界道遺跡では晩期の土器棺や貯蔵穴を検出している。

弥生時代は明確な遺構が見つかっていないが、寺界道遺跡では前期の土器片が、木幡の西浦遺跡では扁平片刃石斧の未成品と考えられる遺物が見つまっている。

古墳時代になると、前期後半には桃山丘陵上に黄金塚2号墳が築造される。全長約138mの前方後円墳で、埴輪列が調査されている。黄金塚1号墳は早い時期に破壊されたため詳細は不明であるが、中期の前方後円墳と考えられている。同じく中期には五ヶ庄地域に円墳の瓦塚古墳が築造される。礫塚と木棺直葬の埋葬施設を持つ。後期になると五ヶ庄に二子塚古墳が築造される。全長112mの前方後円墳で横穴式石室を埋葬施設としていたようである。二子塚古墳の築造を契機として、古墳の東にある丘陵地に木幡古墳群が築造される。大部分が宮内庁管理の宇治陵として残されており、約120基が知られる。近年宇治陵周辺の発掘調査で削平された古墳が発見されており、さらに数は増えるものと思われる。

白鳳期には五ヶ庄に岡本廃寺が建立される。これを前後する時期には西浦遺跡・寺界道遺跡で竪穴住居を検出しており、この時期に集落が拡大する傾向がある。

平安時代後期になると、藤原氏との関係が深くなる。木幡は藤原氏の埋葬の地となり、その一門の墓を弔うため寛弘2年に藤原道長により浄妙寺が建立される。このほか藤原氏の別業である

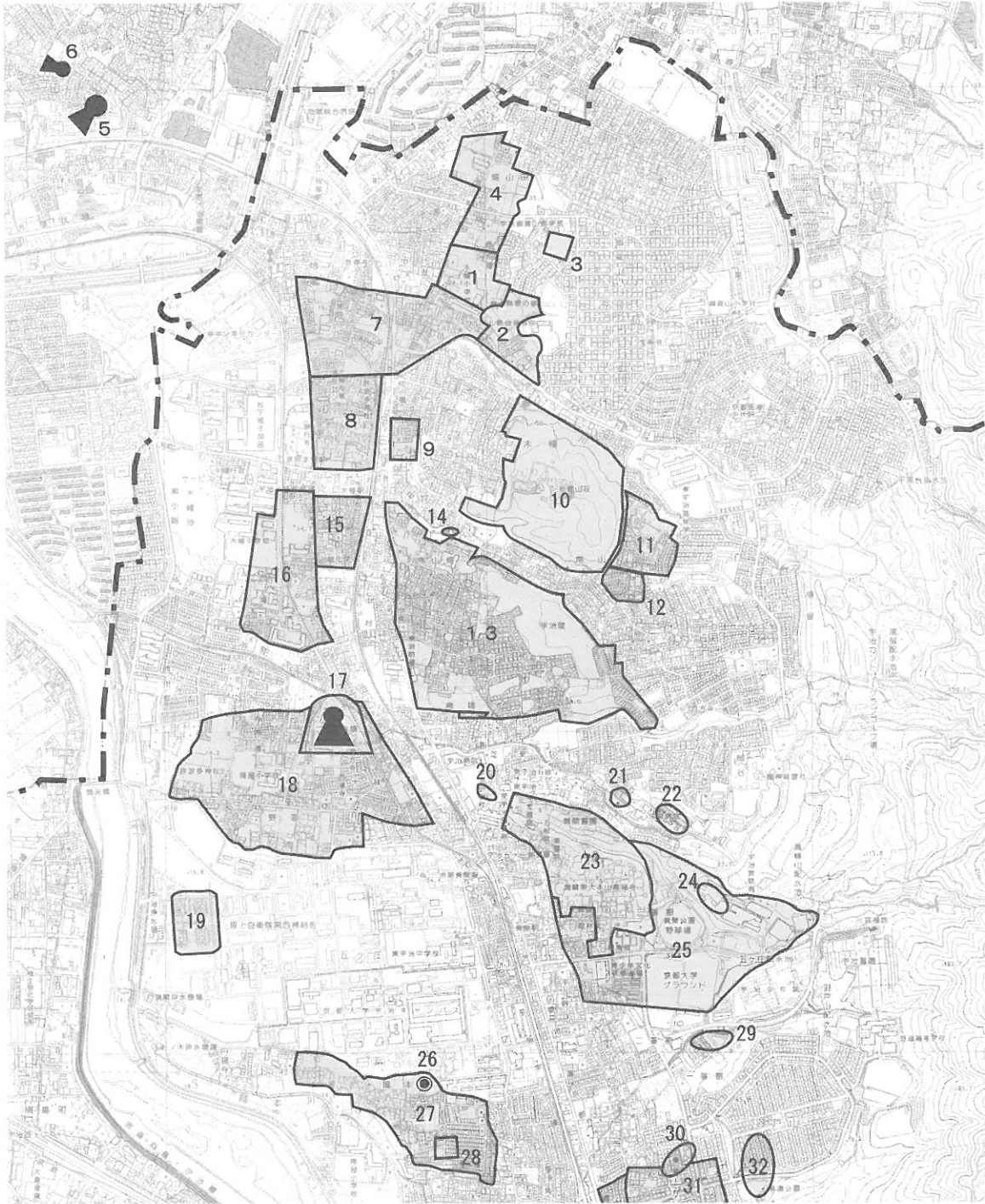


Fig.2 周辺の遺跡分布図(平成17年測量、20000分の1)

- | | | | |
|----------|-------------|------------|-------------|
| 1、浄妙寺跡 | 9、尊勝寺跡 | 17、二子塚古墳 | 25、萬福寺塔頭跡 |
| 2、金草原遺跡 | 10、松殿跡 | 18、寺界道遺跡 | 26、瓦塚古墳 |
| 3、御蔵山古墳群 | 11、京極殿跡 | 19、尼ヶ塚遺跡 | 27、岡本遺跡 |
| 4、赤塚遺跡 | 12、観音寺跡 | 20、芝ノ東窯跡 | 28、岡本廃寺・瓦窯跡 |
| 5、黄金塚2号墳 | 13、木幡古墳・墳墓群 | 21、広岡谷古墓 | 29、一番割遺跡 |
| 6、黄金塚1号墳 | 14、北山畑瓦窯 | 22、広岡谷遺跡 | 30、隼上り瓦窯跡 |
| 7、木幡遺跡 | 15、観音院本願寺跡 | 23、萬福寺境内 | 31、隼上り遺跡 |
| 8、木幡東中遺跡 | 16、西浦遺跡 | 24、萬福寺裏山古墳 | 32、羽戸山遺跡 |

京極殿や富家殿、松殿などがつくられる。富家殿はその正確な位置は分かっておらず、また京極殿は推定地が古い段階で削平を受け、発掘調査を実施したが遺構等は検出しなかった。しかし松殿は、現在良好な状態で保存されており、土塁状遺構（築地か）も確認できる。

C 浄妙寺の概要と過去の調査

浄妙寺は前述したとおり藤原道長によって寛弘2年（1005）に建立された。その建立の契機や経過については『御堂関白記』や『造寺願文』などに詳しい。当初建立された堂は本堂である法華三昧堂であるが、2年後には多宝塔が造られ寺観が整う。

その後浄妙寺周辺の木幡には道長・頼通をはじめとする藤原氏一門の墓が造られるが、鎌倉時代になると別当職が藤原氏から聖護院宮家に移り、文献にもあまり登場しなくなる。廃絶に関してはいくつかの説があるが、現在のところ『碧山日録』にある寛正3年（1462）に一揆により焼亡し廃絶したとする説が有力である。

室町時代に廃絶した浄妙寺であるが、江戸時代の段階には大門跡などが残っており、寺の位置は明らかであったようだが、昭和に入るとほぼその位置は分からなくなっていた。わずかに「ジョウメンジバカ」と通称される墓地などにその名前を残すのみであった。林屋辰三郎は昭和17年の「藤原道長の浄妙寺に就いて」で、浄妙寺の位置を考察した。

昭和41年、宇治市は木幡赤塚の畑地に小学校の新設計画を発表したが、この地が浄妙寺跡の推定地であるとの指摘を受け急遽発掘調査を実施することとなった。これが第1回目の発掘調査である。この調査は、わずかに半月ほどの調査であったが、法華三昧堂の縁の束石と考えられる礎石と基壇の一部を検出した。この結果を受けて、新設小学校は敷地の北側に建てる予定であった校舎を南側に移し、遺構を保存することとなった。

敷地の南側に校舎を建て、北側に校庭を設けた木幡小学校は、校庭の排水不良が問題となってきた。そこで暗渠排水を設置することとなったが、保存されているはずの法華三昧堂の正確な位置と埋没深度が不明であったため、平成2年に発掘調査を実施することとなった。これが第2次調査である。調査の結果、法華三昧堂基壇の全体と、三昧堂基壇の東側に一段高い平坦面を検出した。この平坦面には瓦の堆積が認められたことから、法華三昧堂の東にあると考えられている多宝塔と考えられた。また基壇の周囲には焼土が堆積しており、火災によって廃絶したことが裏付けられた。

3 浄妙寺跡の発掘調査

A 地形と層序

調査地は、本来東から西に傾斜する緩斜面であることは、木幡小学校建設時の発掘調査の記録から明らかである。平成2年度の発掘調査においても、多宝塔土壇と考えた地点が一段高く、法華三昧堂は雛壇造成されていた。今回の調査でも、学校敷地東端で標高約25.9m、西端で23.6mであり、約110mの距離で2.3mの比高差がある。学校建設の際の造成は、敷地東側は若干の切土を行い、大部分は盛土を行ったようである。

B 平成15年度の調査（第3次調査）

平成15年度の調査は、平成2年度の調査において多宝塔基壇の可能性を指摘した地点と、寺域の西限を探る目的で学校敷地の西端にトレンチを設定した。

301トレンチ 301トレンチは、平成2年度の調査において多宝塔基壇の可能性を指摘した地点である。しかし幅2.5mのトレンチ調査であったこともあり確証を得るに至らなかった。このため115㎡のトレンチを設定して調査を行った。

この地点は、学校敷地内でも最東部にあたり、本来の地形が最も高い地点である。このため敷地の造成によって削平を受けており、現地盤で地山が露出している状況であった。また遊具の設置などによる攪乱が多く、多宝塔と決定付ける遺構の検出は見なかった。しかし、一部で整地層と見られる粘土層を検出した。

302トレンチ 302トレンチは、多宝塔基壇の南西コーナーと、2次調査では雛壇造成した土壇の裾の溝が東に折れる様相を呈していたため、その延長部を確認するため設定したトレンチである。校庭内に敷設してある暗渠排水があるため、部分的に掘り下げた。その結果溝・ピット等を検出したが、基壇と思われる遺構は検出しなかった。またこのトレンチ内では雛壇造成の状況は検出しなかった。

303トレンチ 303トレンチは、寺域制限を探るため、学校敷地の西端に設定したトレンチである。層序は、地表から約1.4mが現表土及び学校建設時の盛土、その下層に旧表土及び耕作土、包含層となる黒褐色土、地山の褐色砂質土である。このトレンチでは溝・土坑を検出した。

溝 SD30301 トレンチのほぼ中央にある南北方向の溝である。検出長5.5m、幅0.4～0.8m、深さ0.2m。

土坑 SK30302 SD30301の東側で検出した不定形の土坑である。長径0.9m、短径0.7m。土坑内から13世紀代の土器が出土している。

C 平成16年度の調査（第4次調査）

平成16年度の調査は、寺域の東と北限の状況を把握するため、学校敷地の北東部に南北方向のトレンチと、北端に東西方向のトレンチを設定した。

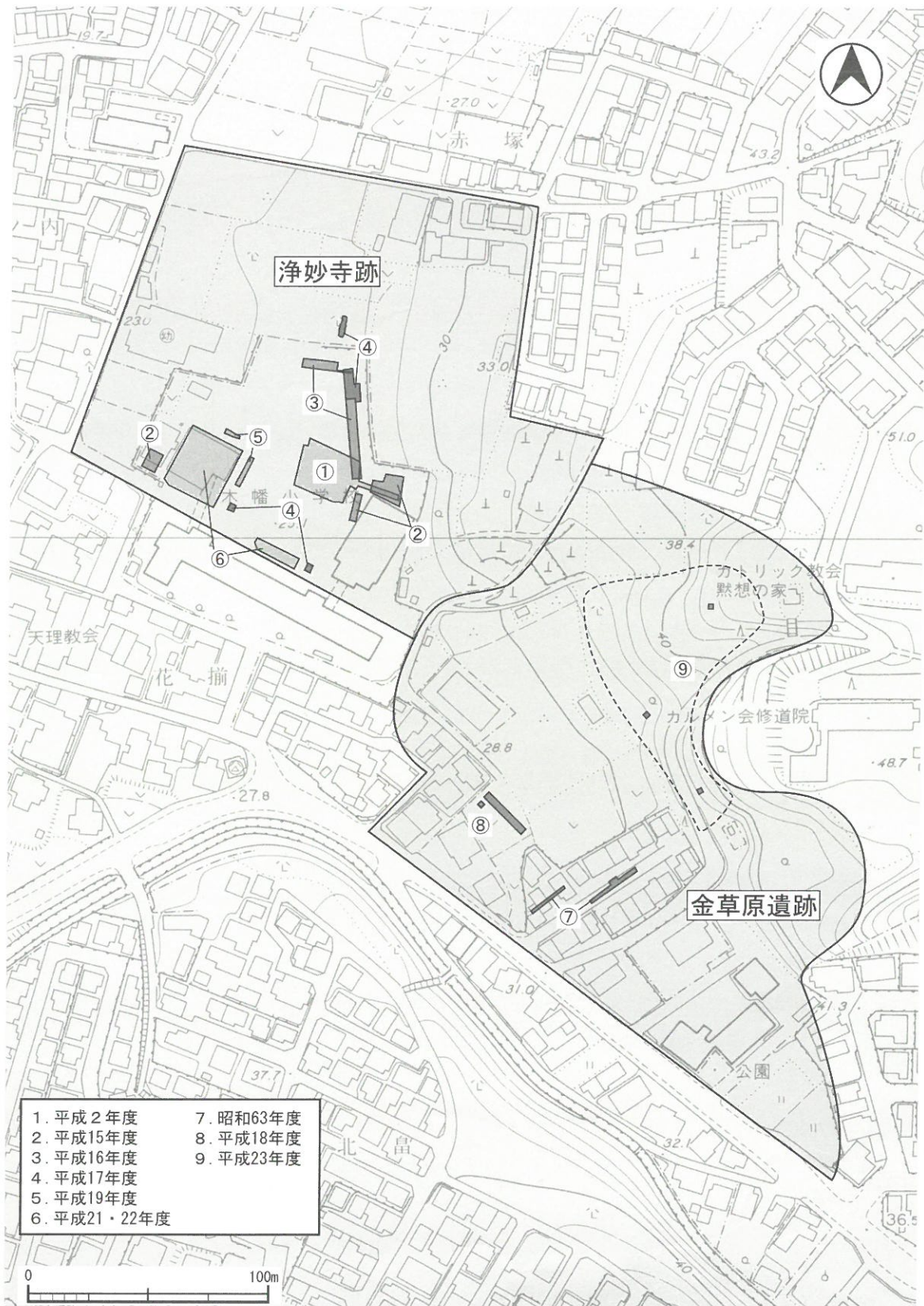


Fig. 3 浄妙寺跡・金草原遺跡調査トレンチ位置図

401トレンチ 401トレンチは、学校敷地の東端に長さ35m、幅4mで設定したトレンチで、トレンチ南端は2次調査で検出した土壇と一部重複している。このトレンチでは、基本的には表土直下で固く締まった整地層を検出した。この整地層は、トレンチ北部で途切れ、緩やかに北と西に下降する。下降する斜面には、炭層を確認した。途切れた形は隅丸方形状を呈する。土壇と重複する部分では、瓦の散布が認められたが、多宝塔と断定できる遺構は検出しなかった。

整地層の下層の状況は、トレンチの東辺とトレンチを横断する断ち割りを2ヶ所設定した観察を行った。その結果、土器が多量に廃棄された土坑と溝を検出した。

土坑 SK40101 トレンチ北東部で検出した土坑である。東西方向が断ち割り外に延びるため、正確な形状は不明だが直径1.7m、深さ0.1mの円形の土坑と思われる。土坑内からは多量の土師器・瓦器などが出土している。12世紀後半。

溝 SD40102 トレンチ中央の断ち割りで検出した溝である。検出長2.5m、幅1m、深さ0.1m。

402トレンチ 学校敷地北端で、東西方向に設定した、4m×15mのトレンチである。ここではトレンチ東部において、地表下0.2mで401トレンチと同様の整地層を検出した。しかしトレンチ中央では、整地面から急激に落ち込む状況が確認でき、雛壇状になっていることが明らかになった。雛壇の下段は地表下約1.7mで、この面では溝や土坑などを検出した。

溝 SD40202 トレンチ西端で検出した南北方向の溝で、検出長2.2m、幅0.8m。ここからは、瓦や土器などがまとまって出土している。

また、整地層の下層の状況を確認するため、断ち割りを行ったが、地表下1.5mまで地山を検出しない状況であった。このため断ち割りトレンチをさらに6m東に延長した。その結果、明確な地山は検出しなかったが、少なくとも3面の遺構面があることが明らかになった。

D 平成17年度の調査（第5次調査）

平成17年度の調査は、学校敷地北部の地形を確認するため、前年の401トレンチと402トレンチの中間に501トレンチを設定した。また文献からは浄妙寺の南限には川があり、第1次調査でも流路跡を確認していることから、その正確な位置を確認するため2ヶ所のトレンチを設定した。また調査中に、学校の北側に隣接する保育所敷地内で、運動場を整備することがわかったため、急遽調査を行うこととした。

501トレンチ 501トレンチは、前年の401・402トレンチをつなぐ形で、当初4m×14mのトレンチを設定した。掘削を進めていったところ、トレンチの南東部でL字形に地山が高くなる部分があったため、2.5m×8mを拡張した。

当初の目的であった地形の変化については、緩やかに地山は北に向かって下がっていくものの、谷状の地形にはならなかった。このことは、後述する504トレンチの調査成果ともあわせて、浄妙寺の地域がさらに北側に広がることを意味する。

このほかに501トレンチでは土壇状遺構や、土器溜り、ピットを検出した。

土壇状遺構 SX50101 SX50101は、方形に地山を削りだした土壇状の遺構である。検出長南北

上端で5.5m、下端で5.8m、東西2.5m、高さ0.3~0.4mである。検出したのは南西コーナーにあたる。検出した地点のすぐ東側は丘陵斜面となっており、大規模な遺構は想定できない。また礎石等は検出しなかった。SX50101の西側には、ピットや土器溜りSX50103が円弧を描くように並ぶ。この遺構に関連する可能性が高いが、その性格は明確にできなかった。

502・503トレンチ 502・503トレンチは、第1次調査の成果をもとに、グラウンドの南部の東と西に、3.5m×3mのトレンチを2ヶ所設定した。いずれのトレンチも黄褐色のシルトと砂の互層であり、河川堆積層と判断した。このため浄妙寺の寺域は、このトレンチより北側に限定されることが明らかになった。

504トレンチ 504トレンチは学校敷地北側の保育所内に急遽設定した、9m×2mのトレンチである。調査前は竹林であった。遺構は検出しなかったが、瓦や土器片が出土したため、この地点も浄妙寺の寺域に含まれるものと判断した。

当初、402トレンチ付近から地山が下がってきたことから、学校敷地の境界付近に谷地形があり、それをもって地域の北限としていた可能性を考えていたが、予想していた地点には谷は存在せず、地域の北限はさらに北にあるものと考えられる。

4 金草原遺跡の発掘調査

A 金草原遺跡と過去の調査

金草原遺跡は、浄妙寺の東にある遺跡で、丘陵部とその南にある堂の川が形成した谷にまたがる遺跡である。かつて茶畑の造成中に完形の越州窯青磁水注（重要文化財、京都国立博物館蔵）が発見されており、浄妙寺の墓域と考えられていた。水注の発見地は、木幡金草原 番地の茶畑で、丘陵斜面を削っているときに出土したと伝えられる。

また「金草原」という地名は、浄妙寺の梵鐘を鑄造した際に出た銅滓を投棄した「カナクソハラ」に由来すると伝えられている。

金草原遺跡では、昭和63年度に宅地開発に伴う発掘調査が行われており、この際には堂の川の旧流路と近世陶磁器を含む土坑を検出している。

B 平成18年の発掘調査（第2次調査）

前年までの調査によって、木幡小学校の校舎を除くほぼ全域が浄妙寺の寺域に入ることが明らかになった。文献によれば西と南には門があることがわかるが、北と東の記述がない。北限については前年の調査で一定推測ができるが、東については情報が不足している状況であった。そこで東に隣接する金草原遺跡での調査が必要となったが、調査が可能な地点がなかった。そこへ前述した開発計画があがってきたため、発掘調査を実施することとなった。

調査は、21.5m×3mのトレンチ（201トレンチ）を設定して行った。掘削を行ったところ、堆積は水分を多く含んだ砂質土で、旧堂の川の影響を多く受けた地点であることがわかった。土層断面を見ると、トレンチの東側からの堆積が認められるため、旧堂の川は調査地点の東から北に向かって流れていたものと思われる。このため川から離れた地点の状況を知るため、2m四方のトレンチ（202トレンチ）を新たに設定し掘削を行ったが、堆積の状況は同様であった。

C 平成23年の発掘調査（第3次調査）

当該調査地は、平成18年度に実施された第2次調査地から東150m圏内にあり、越州窯青磁水注が発見された茶畑東側の丘陵地上に位置する。墳墓が遺存する可能性が高いと思われる平坦な場所に限定して、調査地点を3ヵ所選び、各地点に2m四方のトレンチを設定した。トレンチは、北から301トレンチ、302トレンチ、303トレンチである。

トレンチを掘削したところ、各トレンチとも構造物の痕跡は認められず、302トレンチの表土直下の黄褐色粘質土層から遺物が少量出土したのみであった。出土遺物は、古墳時代や奈良時代と思われる須恵器や土師器の破片である。土層の堆積状況から、これらの遺物を含む包含層は、尾根の頂上から崩落した土砂が堆積したものと思われるため、尾根上に平安時代より古相の遺跡が存在する可能性があると思われる。

5 主要出土遺物

出土した遺物は、コンテナ 20 箱にのぼる。以下主要な遺物について述べる。

A、瓦

鬼瓦（図面図版 PL.13・写真図版 PL.28）

1、（図面図版 PL.13・写真図版 PL.28）

401トレンチ暗渠北側部分より出土。全体は不明。口から頬にかけての部分と思われる。周囲に複圏線文帯が巡る。色調は暗灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。平等院からも同型の鬼瓦が出土している。河内向山系瓦。平安時代後期。

軒丸瓦（図面図版 PL.13、PL.14・写真図版 PL.28）

2、（図面図版 PL.13・写真図版 PL.28）

302トレンチ P 30201より出土。三巴文を内区主文とする。外区内縁は2条の圏線で画される。外縁は直立縁である。色調は灰色から黒灰色を帯び、胎土に砂粒を含む。平安時代後期。

3、（図面図版 PL.13・写真図版 PL.28）

401トレンチより出土。重弁蓮華文軒丸瓦である。内区と外区は1条の圏線で画される。外区内縁の珠文は疎に施す。外縁は直立縁である。色調は灰色から灰白色を呈し、胎土に砂粒を含む。平安時代か。

4、（図面図版 PL.13）

401トレンチ南土壇より出土。単弁六弁蓮華文軒丸瓦である。中房は不明であるが、太い圏線が巡る。内区の花弁は楕円形状を呈し、内区外縁は太い圏線が巡る。色調は灰オリーブ色を呈し、焼成は甘く、軟質である。胎土に小礫を含む。平成2年度調査時に多宝塔西北部より同型のものが1点出土している。時期は平安時代後期。

6、（図面図版 PL.13）

401トレンチ東側断割より出土。単弁六弁蓮華文軒丸瓦である。損傷が激しい。色調は暗青灰色で、軟質。胎土に白色砂粒を含む。

7、（図面図版 PL.13）

402トレンチ SD40202より出土。三巴文軒丸瓦である。外縁は重圏文帯である。色調は灰白色から暗灰色を呈し、焼成は良く、胎土に砂粒を含む。時期は鎌倉時代。

8、（図面図版 PL.13・写真図版 PL.28）

402トレンチ黄褐色粘土上面より出土。三巴文を内区主文とする。外縁は内斜面の直立縁である。外区内縁は1条の圏線で画され、珠文を密に施す。色調は青灰色で、胎土は精製されている。鎌倉時代か。

9、（図面図版 PL.13・写真図版 PL.28）

402トレンチの排出土に混在していた遺物である。四重圏文軒丸瓦である。内区に4条の重圏文が巡り、外区内縁の珠文は密に施す。周縁の文様は二重圏文である。色調は灰色で、軟質である。

胎土に小礫を含む。同型のものが、法華三昧堂南辺と平等院より出土している。時期は平安時代。

10、(図面図版 PL.13・写真図版 PL.28)

402トレンチより出土。三巴文軒丸瓦である。内区と外区を1条の圏線が画す。外区内縁には、珠文が2個1組で一定の間隔で配されている。灰白色を呈し、硬質である。同型瓦が法華三昧堂南辺より出土している。時期は平安時代である。

11、(図面図版 PL.14)

501トレンチより出土。巴文軒丸瓦である。巴の尾部の部分で、左巻きである。周縁は二重圏線である。色調は灰色を呈し、硬質である。胎土に砂粒を含む。平安時代後期。

12、(図面図版 PL.14)

501トレンチより出土の右巻きの巴文軒丸瓦である。遺存部分は圏線と巴の尾との重なる部分である。瓦当面に砂の付着が見られる。色調は暗青灰色で、焼成は良。胎土に白色の小石を含む。軒平瓦(図面図版 PL.14・写真図版 PL.29)

13、(図面図版 PL.14・写真図版 PL.29)

303トレンチ第1黒色土面より出土。剣頭文軒平瓦である。瓦当面に剣頭文が並んでいるが右端には剣頭文の印刻がない。凹面側に並んだ非平行な2本の線刻が認められる。顎は段顎で、折り曲げ技法により製作される。色調は黒灰色を呈し、焼成は悪い。胎土に石英・長石・雲母などの鉱物粒を含む。過去の調査で法華三昧堂北西より同型のものが出土している。栗栖野瓦窯産。平安時代後期。

14、(図面図版 PL.14)

401トレンチ中央断割部から出土。瓦当表面は磨耗により損傷が激しいため、文様は不明な部分が多いが、上外区に珠文が確認できる。顎は曲線顎である。色調はにぶい黄橙色、焼成は甘い。胎土に白色の小石を含む。

15、(図面図版 PL.14・写真図版 PL.29)

401トレンチ暗渠北側より出土。均正唐草文軒平瓦である。段顎で、色調は黄橙色を呈する。焼成は甘く軟質で、胎土に小石を含む。同型と思われるものが多宝塔整地層より出土している。栗栖野瓦窯産。11世紀中ごろ。

16、(図面図版 PL.14・写真図版 PL.29)

401トレンチ中央断割より出土。均正唐草文軒平瓦である。顎は段顎で、瓦当表面に細砂が付着する。離れ砂か。色調は青灰色を呈し、硬質。胎土に細砂を含む。河内向山産。平安時代後期。

17、(図面図版 PL.14)

401トレンチ南土壇より出土した軒平瓦である。周縁を二重に施す。色調は灰色で、軟質。胎土に小石を含む。今熊野池田窯産瓦の胎土に近いと思われる。

18、(図面図版 PL.14)

401トレンチ中央断割より出土。均正唐草文軒平瓦である。凹面に粗い布目が残る。瓦当裏面は損傷が激しいため、調整は不明である。色調は灰色で、軟質。胎土にφ5mmの小石を含む。同

類のものが多宝塔整地層より出土している。今熊野産。平安時代中期。

19、(図面図版 PL.14・写真図版 PL.29)

402トレンチ包含層より出土の均正唐草文軒平瓦である。外縁は直立縁で、顎は段顎である。色調は青黒色で、硬質である。三昧堂周辺で最も多く出土している。

20、(図面図版 PL.14・写真図版 PL.29)

402トレンチ包含層より出土。花卉文軒平瓦である。花卉の蕾文が連結する。内区と外区は1条の圏線で画される。顎は曲線顎。胎土は青灰色で、小石を多く含む。焼成はよく、硬質である。広隆寺旧境内出土のものと同型である。平安時代後期。

21、(図面図版 PL.14・写真図版 PL.29)

501トレンチより出土した軒平瓦である。3条の弧線が見られる。色調は暗青灰色から灰色を呈し、硬質である。胎土に砂粒を多く含む。同範のものが平等院から出土している。池田瓦窯産。平安時代中期。

22、(図面図版 PL.14)

501トレンチより出土。均正唐草文軒平瓦である。灰色を呈し、硬質である。砂粒を少し含む。

23、(図面図版 PL.14・写真図版 PL.29)

501トレンチより出土。内区は上下2段に四辺形の印刻幾何学文が連なる。上外区と内区を1条の太い圏線が画する。凹面に荒い布目が残る。色調は灰黄色で、硬質である。池田瓦窯産のものと同紋のものが見られる。

丸瓦 (図面図版 PL.15・写真図版 PL.30)

平成2年度の調査においては、2種の丸瓦が出土している。丸瓦Aは、凸面に縄叩きを施し、そのままその痕跡を残すもの。丸瓦Bは、凸面の縄叩き後、ナデもしくはヘラケズリにより縄叩き痕を消すものである。前回の調査においても、丸瓦Bが主体を占めていたが、今回の調査においても丸瓦Bが主体を占めている。

平瓦 (図面図版 PL.16、PL17・写真図版 PL.31、PL32)

平瓦は3種類が出土している。すなわち凸面に縄叩きを施すもの(A類)、条線文叩きを施すもの(B類)、離れ砂を用いるもの(C類)の3種である。C類は、凹面に布目痕を残し、その後ナデ消しているものと、無調整のものがある。平成2年度の調査では、C類が主体を占め、縄叩きを行うA類は少数であったが、今回の調査ではA類の出土も多く、法華三昧堂以外の建物は改修が行われず、古い瓦が残っていたのかもしれない。

B 土器 (図面図版 PL.18・写真図版 PL.33～PL35)

SK40101出土の土器 SK40101は整地層下層から検出した廃棄土坑と思われるが、ここからは土師器・瓦器・須恵器が出土している。大部分を土師器の皿が占めている。「て」字状口縁を持つものや二段ナデを持つもの一段ナデ面取口縁を持つものがある。瓦器は樟葉形の椀と小型の椀が出土している。また東海系の山茶碗が1点出土している。13世紀前半。

SD40201出土の土器 SD40201は、南北方向の溝で、ここからは土師器の皿、台付き椀や瓦が出土している。一段ナデを持つものが多く、13世紀代のものが主体となる。

SX50103出土の土器 SX50103は、土壇状遺構の西側にある土器溜りである。土師器の皿や台付き皿が出土している。「て」字状口縁を持つものや二段ナデを持つものが主体となっており、12世紀後半と思われる。

墨書土器 PL18の110は、501トレンチから出土したコースター形の皿であるが、皿の内外面に墨書が認められる。外底面には、直線を引いた後、線に対して斜めに5本の線が引かれており、文字ではなく絵画的なものかもしれない。内面には短い線が3本以上描かれている。

C 鉄釘 (図面図版 PL.18)

303トレンチでは鉄釘が出土しており、3点を図示した。40は頭部を叩いて板状にし、それを巻き込んで輪状にしている。残存長4.8cm、幅3.5～4.5mm。41は先端のみ欠失している。残存長3.8cm、幅3mm×4mm。42は頭部と先端を欠損している。残存長3.1cm、幅5mm×3mm。

6 総 括

A 浄妙寺の四至

平成15年度からの5カ年にわたる調査と、平成21年度の校舎増築に係る調査によって、ある程度明らかになってきた。まず南限に関しては、平成21年度の調査で築地跡を検出していることから、これによって確定できる。

次に西限であるが、現在木幡小学校の西にある「三十番神街道」は、『宇治市史』によれば中世以降の南北路とされている。しかし、『兵範記』仁安2年1月27日の条の、故藤原基実の遺骨を浄妙寺に移す記事では、「未明着御木幡、入信基下馬、自南辻御、経浄妙寺門前」とあり、浄妙寺の南門前を通る道には南北路との「辻」があったことがわかる。とすると、「三十番神街道」が中世以降の道ではなく、平安時代からあった可能性が高い。であるならば、浄妙寺の西門は「三十番神街道」に面していたということになるだろう。発掘調査では、学校敷地内では浄妙寺に関連する遺構を検出しているため、学校敷地と道路との間に西限を求めることができる。

東限については、平成21年度の調査で検出した築地跡のラインを東に延長すると、「ジョウメンジバカ」と呼ばれる墓地がある丘陵部にあたる。浄妙寺の南を流れる旧堂の川は、法華三昧堂の南あたりで上流に向かって南に屈曲するため、流れに合わせて築地も南に折れるかもしれないが、それにしても丘陵部にかかるため現在の学校敷地を大きく逸脱しない範囲にあるものと思われる。もっとも、東側には浄妙寺に関連する墓域となるため、東側には明確な境界を持たなかったのかもしれない。

北限については、504トレンチにおいても瓦等が出土するため、さらに北側になるものと思われるが、遺構・遺物とも希薄になるため、至近のところにあるものと思われる。

これらのことを総括すると、浄妙寺の寺域は現在の木幡小学校の敷地を中心として、西と北に僅かに広がった範囲とすることができる。

B 金草原遺跡について

今回の調査では、金草原遺跡については浄妙寺に関連する遺構・遺物は検出しなかった。重要文化財の青磁水注は、茶畑を広げるため丘陵斜面を削っているときに出土したという。茶畑の東に隣接する敷地を見ると、斜面の途中に平坦面が認められる。こうした平坦面に墓が作られていた可能性も考えられる。

今回の調査は、小規模なものであったため、今後の調査が必要である。

C 鎌倉時代以後の浄妙寺

今回の調査では、鎌倉時代以後整地面を拡大している様子が確認された。鎌倉時代以後、浄妙寺の別当職は藤原氏から聖護院宮家に移り、文献に登場する頻度も減るが、撰閲家の埋骨は続いており、一定の寺勢は保っていたものと思われるが、特に注目されるのは、整地層下から検出し

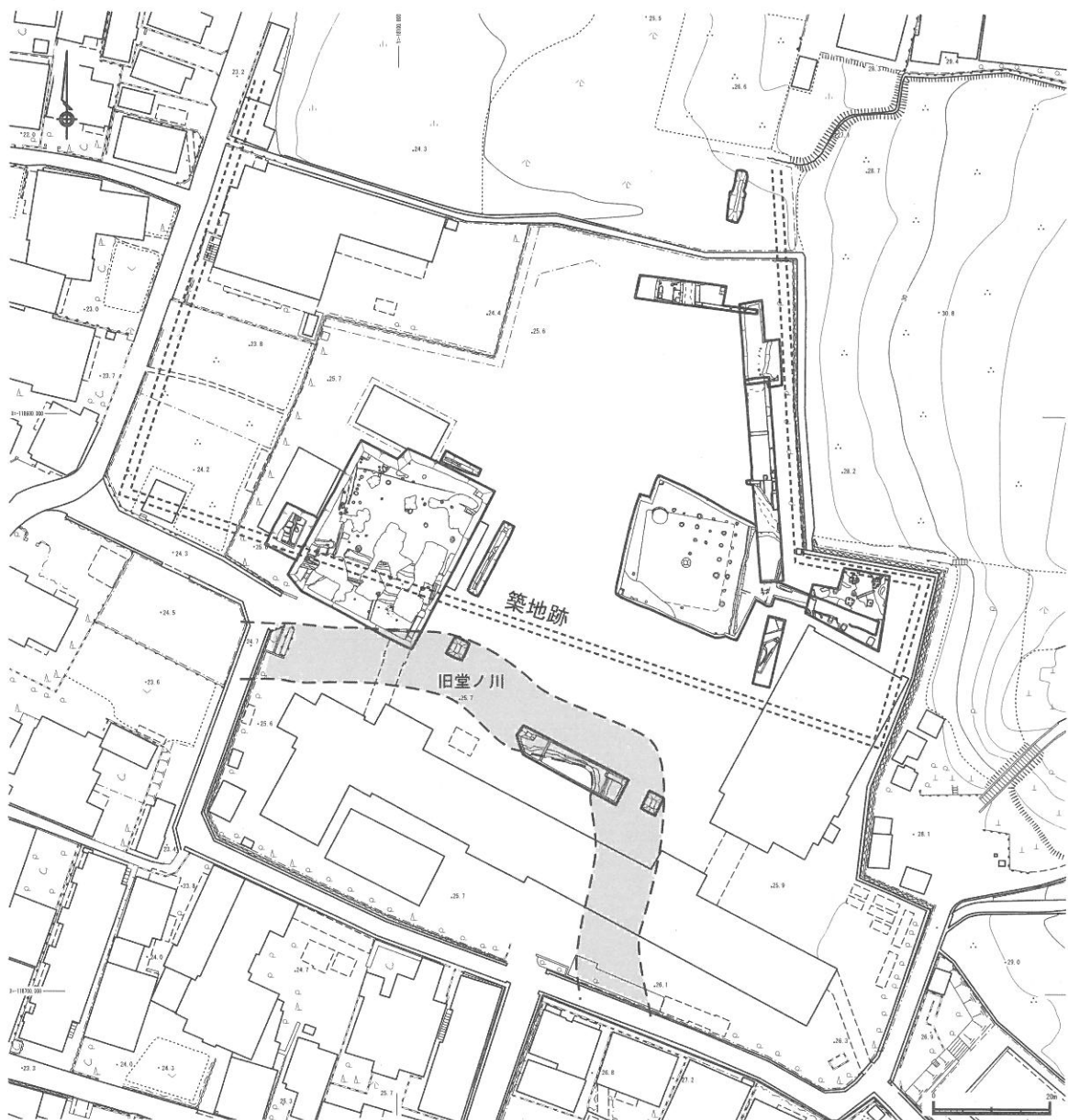


Fig.4 浄妙寺の範囲

たSK40101である。ここから出土した土器は、13世紀前半代と考えられ、この時期に整地が行われたものと考えられる。

13世紀前半代において、浄妙寺に関連する史料としては、寺の改修などの記事は見られないが、木幡に関連するものとして、藤原基房が木幡逆修所において詩歌会を催したり（『明月記』）、逆修を行う（『民経記』）といった記事が見られる。藤原基房の木幡逆修所は、浄妙寺の南東の丘陵上と伝えられており、600mほどの距離のところにある。丘陵上には、延長約400mの土塁が中心部を囲っており、よく旧状を留めている。

藤原基房は、藤原忠通の子で兄基実の死後氏の長者となったが、摂関家の遺領をめぐって平清盛と争い、一旦政治の表舞台から消えることとなる。その後源義仲が入京すると、義仲と結んで

復権するが、義仲が討たれると再び政治の中枢に戻ることはなかった。基房の兄弟は、近衛家・九条家に別れ、後の五摂家の始祖となるが、基房の松殿家は後に続かなかった。しかし基房は、有職故実にもよく通じ、晩年は元老として顧問的な役割を果たしており、後鳥羽上皇の信任も厚かったようである。

木幡の逆修所がいつ造られたのかは明確ではないが、上述の詩歌会の記事が初出であり、安貞元年（1227）のことである。少なくともこの時期に、基房は浄妙寺に程近い場所にいたのである。故事に通じ、かつての氏の長者であった基房が、藤原氏の墓所を守る浄妙寺に関与を持った可能性があるのではないかと考えられる。

《参考文献》

- 「浄妙寺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』 京都府教育委員会 1967
- 『宇治市史』第1巻 宇治市 1973
- 『宇治市史』第2巻 宇治市 1974
- 『宇治市史』第5巻 宇治市 1979
- 『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅰ』 奈良国立文化財研究所 1974
- 『大谷中高等学校地内遺跡発掘調査報告』 大谷高等学校法住寺遺跡調査会 1984
- 廣田長三郎編『古瓦図考』 1989
- 「木幡浄妙寺跡発掘調査報告」『宇治市文化財調査報告』第4冊 宇治市教育委員会 1992
- 『平安京提要』 財団法人 古代学協会・古代学研究所 1994
- 『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会 1995
- 平田泰・小檜山一良「23 広隆寺旧境内」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995
- 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』3 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996
- 「京都嵯峨野の遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第14冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997
- 『平等院境内発掘調査報告書』 宗教法人平等院 2000
- 「中世瓦の研究」『奈良国立文化財研究所学報』第59冊 奈良国立文化財研究所 2000

付表1 報告書掲載遺物一覧表

No.	出土地点	器種	器形	法 量			胎 土			文様・調整等	図面 図版	写真 図版	備 考
				器径cm	器高cm	残存%	色調	質	焼成				
1	401トレンチ 暗渠北側	瓦	鬼瓦				青灰	小石含	良	複園線文帯	PL. 13	PL. 33	河内向山系 平安時代
2	302トレンチ P30201	瓦	軒丸瓦				灰～ 黒灰	砂粒含	良	左巻き三巴文	PL. 13	—	平安時代後期
3	401トレンチ	瓦	軒丸瓦				灰～ 灰白	砂粒含	不良	重弁蓮華文	PL. 13	PL. 33	平安時代
4	401トレンチ 南土壇	瓦	軒丸瓦				灰オリーブ	小石含	やや 不良	単弁六弁蓮華文	PL. 13	PL. 33	今熊野池田瓦窯産 平安時代中期
5	401トレンチ 中央断割	瓦	軒丸瓦				青黒	砂粒含	不良	瓦当裏面に輪状の凸帯	PL. 13	—	今熊野池田瓦窯産 平安時代中期
6	401トレンチ 東側断割	瓦	軒丸瓦				暗青灰	小石含	不良	単弁六弁蓮華文	PL. 13	—	
7	402トレンチ SD40202	瓦	軒丸瓦				灰白～ 暗灰	砂粒含	良	右巻き三巴文	PL. 13	—	鎌倉時代か
8	402トレンチ 黄褐色粘土上面	瓦	軒丸瓦				明灰～ 暗青灰	精良	やや 不良	三巴文	PL. 13	—	鎌倉時代か
9	402トレンチ 排土	瓦	軒丸瓦				灰	小石含	不良	四重園文	PL. 13	PL. 33	平安時代
10	402トレンチ	瓦	軒丸瓦				灰白	小石含	良	右巻き三巴文	PL. 13	PL. 33	平安時代
11	303トレンチ 第1黒色土面	瓦	軒平瓦				灰褐～ 黒灰～褐	小石含	不良	剣頭文 ヘラ記号あり	PL. 14	PL. 34	栗栖野瓦窯産 平安時代後期
12	401トレンチ 中央断割	瓦	軒平瓦				にぶい黄橙	小石含	やや 不良		PL. 14	—	
13	401トレンチ 暗渠北側	瓦	軒平瓦				黄橙	小石含	不良	均整唐草文	PL. 14	PL. 34	栗栖野瓦窯産 11世紀中頃
14	401トレンチ 中央断割	瓦	軒平瓦				暗青灰	砂粒含	良	均整唐草文	PL. 14	PL. 34	河内向山産 平安時代後期
15	401トレンチ 南土壇	瓦	軒平瓦				灰	小石含	やや 不良	二重周縁	PL. 14	—	今熊野池田瓦窯産か
16	401トレンチ 中央断割	瓦	軒平瓦				灰	小石含	不良	均整唐草文 凹面に荒い布目	PL. 14	—	今熊野池田瓦窯産 平安時代中期
17	402トレンチ 包含層	瓦	軒平瓦				青黒	小石含	良	均整唐草文 当て具痕	PL. 14	PL. 34	室町時代中期
18	402トレンチ 包含層	瓦	軒平瓦				青灰	小石含	良	花卉文	PL. 14	PL. 34	河内向山産 平安時代後期
19	501トレンチ 重機掘削中	瓦	軒平瓦				暗青灰 ～灰	小石含	良	3条の弧線	PL. 14	PL. 34	今熊野池田瓦窯産
20	501トレンチ 南西部黄褐色土層	瓦	軒丸瓦				灰	小石含	良	左巻き三巴文	PL. 14	PL. 33	
21	501トレンチ 南西部黄褐色土層	瓦	軒丸瓦				暗青灰	小石含	やや 良	右巻き三巴文 瓦当面に砂付着	PL. 14	—	
22	501トレンチ 中央炭混じり周辺	瓦	軒平瓦				灰白	砂粒含	良	均整唐草文	PL. 14	—	
23	501トレンチ 重機掘削中	瓦	軒平瓦				灰黄色	小石含	良	上下段に四辺形幾何学文 凹面に荒い布目	PL. 14	PL. 34	今熊野池田瓦窯産か
24	401トレンチ 中央断割	瓦	丸瓦				灰白	小石含	不良	凸面 縄叩き後ナデ消し 凹面 布目か采きり痕	PL. 15	PL. 35	
25	401トレンチ 中央断割	瓦	丸瓦				灰白	小石含	不良	凸面 縄叩き後ナデ消し 凹面 荒い布目	PL. 15	PL. 35	
26	401トレンチ 中央断割	瓦	丸瓦				灰白	小石含	不良	凸面 縄叩き後ナデ消し 凹面 荒い布目	PL. 15	PL. 35	
27	402トレンチ SD40202	瓦	丸瓦				暗青灰	精良	良	凸面 ケズリ 凹面 布目・吊り紐痕	PL. 15	PL. 35	
28	402トレンチ SD40202	瓦	丸瓦				暗青灰	精良	やや 不良	凸面 縄叩き後ナデ消し 凹面 細布目・吊り紐痕	PL. 15	PL. 35	

付表1 報告書掲載遺物一覧表

No.	出土地点	器種	器形	法量			胎土			文様・調整等	図面 図版	写真 図版	備考
				器径cm	器高cm	残存%	色調	質	焼成				
29	401トレンチ 中央断割	瓦	平瓦				灰	小石含	良	凸面 縄叩き・離れ砂 凹面 布目・糸切り痕	PL. 16	PL. 36	長端あり
30	401トレンチ 中央断割	瓦	平瓦				灰	小石含	良	凸面 縄叩き・離れ砂 凹面 布目・離れ砂	PL. 16	PL. 36	
31	401トレンチ 中央断割	瓦	平瓦				灰	砂粒含	良	凸面 糸切り痕・離れ砂 凹面 切り痕・離れ砂	PL. 16	PL. 37	
32	401トレンチ 中央断割	瓦	平瓦				灰	小石含	良	凸面 条線叩き 凹面 布目	PL. 16	PL. 36	全体的に薄い・自然釉
33	402トレンチ P40206	瓦	平瓦				灰	小石含	良	凸面 縄叩き・離れ砂 凹面 糸切り痕・離れ砂	PL. 16	PL. 36	
34	402トレンチ P40206	瓦	平瓦				暗青灰	小石含	良	凸面 ナデかケズリ・離れ砂 凹面 ナデ・離れ砂	PL. 16	PL. 37	
35	402トレンチ P40206	瓦	平瓦				暗青灰	小石含	やや良	凸面 ナデ・離れ砂 凹面 ナデ	PL. 16	PL. 37	
36	402トレンチ SD40202	瓦	平瓦				灰	小石含	良	凸面 ケズリ・離れ砂 凹面 ナデ・一部布目	PL. 16	PL. 37	
37	303トレンチ SK30302	土師器	皿	8.7	1.6	25%	淡褐	精良	やや不良	口縁部ナデ 底部不調整	PL. 17	—	
38	303トレンチ SK30302	土師器	皿	11.6	2.4	15%	赤褐	精良	良	口縁部ヨコナデ 底部不調整	PL. 17	—	
39	303トレンチ SK30302	土師器	皿	15.4	2.2	10%	淡黄褐	砂粒含	やや不良	口縁部ヨコナデ 底部不調整	PL. 17	—	
40	303トレンチ 精査中	鉄製品	方形釘	残存長 4.8	幅 0.4	90%					PL. 17	—	
41	303トレンチ 精査中	鉄製品	方形釘	残存長 3.8	幅 0.4	90%					PL. 17	—	
42	303トレンチ 精査中	鉄製品	方形釘	残存長 3.1	幅 0.5	40%					PL. 17	—	
43	401トレンチ SK40101	土師器	皿	8.4	1.5	35%	にぶい橙	小石含	良	口縁部二段ナデ 底部不調整	PL. 17	—	平安時代後期 12世紀前半
44	401トレンチ SK40101	土師器	皿	8.4	不明	15%	にぶい橙	砂粒含	良	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	PL. 17	—	平安時代後期 12世紀後半
45	401トレンチ SK40101	土師器	皿	9	1.7	15%	にぶい黄橙	砂粒含	良	口縁部ヨコナデ 底部不調整	PL. 17	—	
46	401トレンチ SK40101	土師器	皿	8.9	1.8	98%	にぶい黄橙	小石含	良	口縁部ヨコナデ 底部外面不調整	PL. 17	PL. 38	スス附着 灯明皿
47	401トレンチ SK40101	土師器	皿	9	1.5	50%	にぶい黄橙	砂粒含	良	口縁部ヨコナデ 底部不定ナデ	PL. 17	PL. 38	スス附着 灯明皿
48	401トレンチ SK40101	土師器	皿	8.8	2	40%	浅黄～ オリーブ黒	砂粒含	良	口縁部ヨコナデ 底部不定ナデ	PL. 17	—	スス附着 灯明皿
49	401トレンチ SK40101	土師器	皿	8.8	1.8	30%	灰黄	精良	良	口縁部ヨコナデ 底部内面ナデ、外面不調整	PL. 17	PL. 38	
50	401トレンチ SK40101	土師器	皿	8.2	2	85%	にぶい黄橙	砂粒含	良	口縁部ヨコナデ 底部不調整	PL. 17	PL. 38	スス附着 灯明皿
51	401トレンチ SK40101	土師器 黒色	皿	9.2	1.9	60%	褐灰		良	口縁部ヨコナデ 底部不調整	PL. 17	PL. 38	内面スス附着
52	401トレンチ SK40101	土師器	皿	8.8	1.7	35%	にぶい黄橙	精良	良	口縁部ヨコナデ	PL. 17	—	スス附着 灯明皿
53	401トレンチ SK40101	土師器	皿	9	1.7	45%	にぶい黄橙	小石含	良	口縁部ヨコナデ	PL. 17	PL. 38	スス附着 灯明皿
54	401トレンチ SK40101	土師器	皿	9.2	1.8	40%	にぶい黄橙	小石含	良	口縁部ヨコナデ	PL. 17	—	
55	401トレンチ SK40101	土師器	皿	12	不明	5%	にぶい橙	砂粒含	良	口縁部ヨコナデ	PL. 17	—	スス附着 灯明皿
56	401トレンチ SK40101	土師器	皿	12.2	2.6	90%	にぶい橙	砂粒含	良	口縁部ヨコナデ 底部内面不定ナデ、外面不調整	PL. 17	PL. 38	スス附着 灯明皿
57	401トレンチ SK40101	土師器	皿	12.2	2.4	30%	にぶい黄橙	精良	良	口縁部ヨコナデ 底部不定ナデ	PL. 17	PL. 38	

No.	出土地点	器種	器形	法 量			胎 土			文様・調整等	図面 図版	写真 図版	備 考
				器径cm	器高cm	残存%	色調	質	焼成				
58	401トレンチ 東側断割土器溜	土師器	皿	9.2	不明	8%	灰白		良	口縁部ヨコナデ・て字状	PL. 17	PL. 38	11世紀末
59	401トレンチ SK40101	土師器	皿	9.2	1.1	25%	にぶい黄橙	砂粒含	良	口縁部ヨコナデ	PL. 17	PL. 38	
60	401トレンチ SK40101	土師器	皿	9.6	1.4	20%	にぶい黄橙	精良	良	口縁部ヨコナデ 底部不調整	PL. 17	PL. 38	
61	401トレンチ SK40101	土師器	皿	9.4	1.5	30%	にぶい橙	小石含	良	口縁部二段ナデ 底部不調整	PL. 17	—	スス付着
62	401トレンチ SK40101	土師器	皿	9.6	1.6	20%	にぶい黄橙	小石含	良	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	PL. 17	—	スス付着
63	401トレンチ SK40101	土師器	皿	10.2	1.1	15%	にぶい黄橙	精良	良	口縁部ヨコナデ 底部不定ナデ	PL. 17	—	
64	401トレンチ SK40101	土師器	皿	10.6	1.3	20%	にぶい黄橙	小石含	良	口縁部ヨコナデ 底部不調整	PL. 17	PL. 38	
65	401トレンチ SK40101	土師器	皿	10.8	1.4	35%	にぶい橙	砂粒含	良	口縁部ヨコナデ 底部内面不定ナデ、外面不調整	PL. 17	—	
66	401トレンチ SK40101	土師器	皿	10.6	1.4	20%	にぶい黄橙	砂粒含	良	口縁部ヨコナデ 底部外面不定ナデ	PL. 17	PL. 38	
67	401トレンチ SK40101	土師器	皿	12.2	1.8	27%	にぶい黄橙		良	口縁部ヨコナデ 底部不定ナデ	PL. 17	—	
68	401トレンチ SK40101	土師器	皿	12	1.9	30%	にぶい黄橙	小石含	良	口縁部ヨコナデ 底部不定ナデ	PL. 17	—	
69	401トレンチ SK40101	土師器	皿	13	1.9	13%	にぶい橙		良	口縁部ヨコナデ	PL. 17	—	
70	401トレンチ SK40101	土師器	皿	12.6	1.9	55%	浅黄橙	砂粒含	良	口縁部ヨコナデ 底部内面不定ナデ、外面不調整	PL. 17	—	
71	401トレンチ SK40101	土師器	皿	13.4	不明	10%	灰白	小石含	良	口縁部ヨコナデ 底部外面不調整	PL. 17	PL. 38	
72	401トレンチ SK40101	土師器	皿	13.6	2.2	10%	にぶい黄橙	小石含	やや良	口縁部ヨコナデ 底部外面不調整	PL. 17	—	
73	401トレンチ SK40101	土師器	皿	13.6	不明	15%	灰黄	小石含	良	口縁部ヨコナデ 底部外面不調整	PL. 17	—	
74	401トレンチ SK40101	土師器	皿	14	2	60%	にぶい黄橙	小石含	やや良	口縁部ヨコナデ	PL. 17	—	
75	401トレンチ SK40101	土師器	皿	14.8	不明	8%	にぶい黄橙		良	口縁部ヨコナデ	PL. 17	PL. 38	
76	401トレンチ SK40101	須恵器	皿	8.2	2.3	90%	灰	小石含	良	ロクロナデ 底部外面糸切り痕	PL. 17	PL. 38	
77	401トレンチ 北東断割	瓦器	椀	7.8	2.5	40%	暗青灰	小石含	良	内面暗文 外面ヨコナデ・ユビオサエ	PL. 17	PL. 38	
78	401トレンチ SK40101	瓦器	台付皿	7.8	2.5	25%	灰	精良	やや良	内面暗文 外面ヨコナデ	PL. 17	—	
79	401トレンチ SK40101	瓦器	椀	14.4	不明	20%	暗青灰	砂粒含	良	内面暗文・1条の沈線 外面ナデ・ユビオサエ	PL. 17	PL. 38	
80	401トレンチ SK40101	土師器	甕	20.4	不明	25%	にぶい黄橙	小石含	良	粘土積み上げ形成。内面 ナデ、外面不調整。	PL. 17	—	
81	401トレンチ SD40102	青磁	椀	底径 4.4	不明	30%	くすんだ緑	精良	良	高台ケズリ 高台および高台内無軸	PL. 17	—	
82	402トレンチ SD40201	土師器	皿	6.4	不明	23%	にぶい黄橙	小石含	良	口縁部ヨコナデ	PL. 17	—	ヘソ皿？
83	402トレンチ SD40201	土師器	皿	11.4	不明	17%	にぶい黄橙	小石含	良	口縁部ヨコナデ 底部内面ナデ・ユビオサエ	PL. 17	PL. 39	
84	402トレンチ SD40201	土師器	皿	7.8	1.4	50%	にぶい黄橙	砂粒含	良	口縁部ヨコナデ 底部内面ナデ、外面不調整	PL. 17	—	
85	402トレンチ SD40201	土師器	皿	8.4	1.3	25%	にぶい橙	小石含	良	口縁部ヨコナデ 底部内面ナデ、外面不調整	PL. 17	PL. 39	
86	402トレンチ SD40201	土師器	皿	8.8	1.1	22%	にぶい黄橙	砂粒含	良	口縁部ヨコナデ 底部内面ナデ、外面不調整	PL. 17	—	

付表1 報告書掲載遺物一覧表

No.	出土地点	器種	器形	法量			胎土			文様・調整等	図面 図版	写真 図版	備考
				口径cm	器高cm	残存%	色調	質	焼成				
87	402トレンチ SD40201	土師器	皿	8.6	1.2	25%	にぶい黄橙	小石含	良	口縁部ヨコナデ 底部内面不定ナデ、外面不調整	PL. 17	PL. 39	
88	402トレンチ SD40201	土師器	皿	10.8	1.6	10%	にぶい黄橙	小石含	良	口縁部ヨコナデ 底部外面ユビオサエ後ナデ	PL. 17	PL. 39	
89	402トレンチ SD40201	土師器	皿	12.2	1.6	6%	にぶい橙	小石含	良	口縁部ヨコナデ 底内面ユビオサエ、外面不調整	PL. 17	PL. 39	
90	402トレンチ SD40201	土師器	台付椀	9.6	2.8	45%	黒～ にぶい黄褐	小石含	良	貼り付け高台 内外ナデ	PL. 17	PL. 39	
91	501トレンチ SX50103	土師器	皿	10	1.8	13%	明黄褐 ～灰黄	雲母含	良	口縁部ヨコナデ 底部内面不定ナデ、外面不調整	PL. 17	PL. 40	
92	501トレンチ SX50103	土師器	皿	10.1	1.9	95%	にぶい黄橙	精良	良	口縁部ヨコナデ 底部内面不定ナデ、外面不調整	PL. 17	PL. 39	ほぼ完形 灯明皿
93	501トレンチ SX50103	土師器	皿	11.6	2.3	22%	にぶい黄橙	小石含	良	口縁部ヨコナデ 底部内面ナデ、外面不調整	PL. 17	PL. 40	スス付着
94	501トレンチ SX50103	土師器	皿	12.2	不明	15%	にぶい橙	砂粒含	良	口縁部ヨコナデ 底部外面不調整	PL. 17	PL. 40	スス付着
95	501トレンチ SX50103	土師器	皿	14	2.5	12%	にぶい黄橙	小石含	良	口縁部ヨコナデ 底部内面ナデ、外面不調整	PL. 17	PL. 40	
96	501トレンチ SX50103	土師器	皿	13.5	2.4	28%	にぶい黄橙	小石含	やや 良	口縁部ヨコナデ 底部内面ナデ、外面不調整	PL. 17	PL. 40	
97	501トレンチ SX50103	土師器	皿	14.9	2.5	15%	にぶい橙	小石含	良	口縁部ヨコナデ 底部内面ナデ、外面不調整	PL. 17	PL. 40	
98	501トレンチ SX50103	土師器	皿	14.8	不明	8%	にぶい黄橙	小石含	良	口縁部ヨコナデ 底部外面不調整	PL. 17	PL. 40	
99	501トレンチ SX50103	土師器	皿	14.5	不明	25%	にぶい黄橙	小石含	良	口縁部ヨコナデ 底部内面ナデ、外面不調整	PL. 17	—	
100	501トレンチ SX50103	土師器	皿	8.8	1.6	20%	浅黄橙	砂粒含	良	口縁部ヨコナデ・て字状	PL. 17	PL. 40	
101	501トレンチ SX50103	土師器	皿	9.1	1.3	20%	にぶい橙	砂粒含	良	口縁部ヨコナデ・て字状 底部ナデ	PL. 17	PL. 40	
102	501トレンチ SX50103	土師器	皿	10.6	1.5	30%	にぶい橙	砂粒含	良	口縁部ヨコナデ・て字状	PL. 17	—	
103	501トレンチ SX50103	土師器	皿	9.4	1.5	23%	灰白	砂粒含	良	口縁部ヨコナデ 底部内面ナデ、外面不調整	PL. 17	PL. 40	
104	501トレンチ SX50103	土師器	皿	10.2	1.6	90%	にぶい橙	小石含	良	口縁部ヨコナデ 底部外面不調整	PL. 17	PL. 39	スス付着
105	501トレンチ SX50103	土師器	皿	10.2	1.4	15%	にぶい黄橙	砂粒含	良	口縁部ヨコナデ	PL. 17	—	スス付着
106	501トレンチ SX50103	土師器	皿	10.7	1.7	90%	にぶい橙～ にぶい黄橙	砂粒含	良	口縁部ヨコナデ 底部内面不定ナデ、外面不調整	PL. 17	PL. 39	スス付着 灯明皿
107	501トレンチ SX50103	土師器	皿		2	15%	にぶい黄橙	小石含	良	口縁部ヨコナデ	PL. 17	PL. 40	
108	501トレンチ SX50103	土師器	皿	15.6	2.5	45%	灰白	小石含	良	口縁部ヨコナデ 底部内面ナデ、外面不調整	PL. 17	PL. 39	
109	501トレンチ SX50103	土師器	高台付皿		高台径 10.3	85%	黄橙	小石含	良	底部外面ナデ 高台ナデ	PL. 17	PL. 39	
110	501トレンチ 整理層中	土師器	皿	8.8	1.5	18%	にぶい橙	砂粒含	良	コースター型 罌書	PL. 17	PL. 40	11世紀後半
111	501トレンチ SX50103	土師器	皿	18	2.75	5%	にぶい橙	砂粒含	良	口縁部二段ナデ	—	PL. 40	
112	401トレンチ 北東断割	土師器	皿	9.8	1.45	35%	にぶい橙	砂粒含	良	口縁ヨコナデ 底部内外面ナデ	—	PL. 38	
113	401トレンチ 北東断割	瓦器	椀	6.8	2.8	30%	青黒	砂粒含	やや 不良	口縁ヨコナデ 底部外面ヨコナデ・ユビオサエ	—	PL. 38	
114	401トレンチ	瓦器	椀	9.2	1.9	19%	暗灰～灰	精良	良		—	PL. 38	

